

ある手紙」チャールズ・ハミルトン著
美術公論社・3500円



自画像と二匹の犬を描くムンク、宛書きの脇に奔放な線画の馬を描いたピカソ、ゴッホやゴー

は動物や人のスケッチが入った楽しいものだ。挿絵画家のセンタクは簡潔にして躍動する手紙を書いている。酒瓶をじっと見つめる

ソ連で共産主義の根本的な見直しが始められている折だけに、この問いの意味は極めて大きい。

―荒―のみ訳
東京大助教授 沼野充義

ルーズベルトは手紙は大きな抵はタイプし、それに手書きの訂正がびっしりと入っているそうだが、ここで探りあげた子供あての手紙に

版に社会主義やスターリニズムといった文脈を離れて読んだとしても、波瀾に富んだ人生を懸命に、また愛情豊かに生きた女性の自伝として文句なしに面白い。



スターリン時代に恐怖の渦中に投げ込まれ、苛酷な収容所生活に耐え抜いたユダヤ系女性の回想である。ソ連の収容所については、既に発売の書が数多く書かれているが、この回想は従来のもとは一線を画すような比類ない体験や観察を含んでおり、実に新鮮である。

ソヴィエト流浪 スザン・ローゼンバーグ著

苛酷な収容所生活の鮮明な回想

た闘士だが、革命後の内戦で命を落とす。一方、母はウクライナで革命運動に従事したが、革命の五年後に混乱の続くソ連をいったん離れる決意をし、娘(筆者)を連れて親戚のいるカナダに移り、共産主義の宣伝を続けた。そして、三一年には移民団を組織して「理想の国」と信じたソ連に娘とともに戻り、ここから著者の「ソヴィエト流浪」が始まるのである。

母親の感化を受け、非常にロマンティックな理想主義者として育っていた。その彼女がソ連に戻って見た現実、理想とはかけ離れたものだった。やがて粛清の時代が始まって、夫は逮捕され、弟は自殺に追い込まれる。そして、最後に母親と著者自身も逮捕され、スパイ罪でシベリア送りになるのである。

とはいえ、これは単なる政治的告発の書ではない。収容所の地獄の中に顔をのぞかせる野いちごを見逃さない著者には、繊細な詩人のまなざしが備わっている。そして、カナダ市民権を取得し、現在カナダに住む彼女は、新しい社会の夢を信じる者たちの「炎は再び燃え上がるのだろうか」と最後に問い掛けるのである。

誰しもこの結びを読めば、「あれほどの辛酸をなめさせられながら、またこんなことを？」と、著者の不屈の理想主義的気質に驚くとともに、爽やかな感動を覚えることだろう。